

小川政弘作「もう一人の羊飼いい」

<第1幕>

(音楽) (牧歌的なイントロ)

ナレーション 今から約2000年前、イエス・キリストのご降誕の少し前、ユダヤの国の出来事です。ベツレヘムという小さな村に、羊飼いのエタンという若者が住んでいました。彼は、エルサレムの都に上って、聖書学校で学ぶという長い間の夢を持っていました。ところがその時、夫に死に別れ、一人息子のルエルを連れて、姉のアムラが村に戻ってきたのですが、心の優しい彼は、その姉を助けるために、やっとかないかけたその夢をあきらめたのでした。

ちょうどそのころ、ナザレの大工ヨセフと、いいなずけのマリヤは、長い旅を終えて、やっとベツレヘムにたどり着いていました。二人は、皇帝アウグストの人口調査の命令に従って、ヨセフの先祖の町、ベツレヘムまで来なければならなかったのです。その時マリヤは、神のみ子を身ごもっていました。

ヨセフ ダメだ！ 村中探したけれど一つも寝床がない。どうしたらよいか本当に分からなくなった。

マリヤ ねえヨセフ。あれは羊飼いの笛でしょう？ 山の上で羊の群れを飼っているのですよ。わたしの小さい時のおり、夢の中でずっと聞き続けた音ですわ。

ヨセフ どうかしなけりゃあ。あの宿屋の亭主にもう一枚金貨をやればいいんだがねえ。そうすりゃあ、どうかできないはずないのに。

マリヤ ここはとてもきれいです。ベツレヘムの夜がどんなだか、すっかり忘れておりました。静かに大ガラスの翼のように、闇が黒く辺りを包んでいくと、星が低く、だんだん、だんだん光を増してきて、手を伸ばせば取って髪に飾れそう。ねえ、ヨセフ。星を髪に飾れるのに、狭苦しい宿屋になんて泊まらなくてもよいでしょう？

ヨセフ マリヤ、マリヤ。あなたはまだ本当に子供ですねえ。外で眠らせるなんてことができますか。

マリヤ なぜ？ 地面を寝床に、空を宿にして眠るなんて、すばらしいではありませんか。ここにいると、どこまでがこの世か、どこからが天か分からないほどです。星を見ながらここに立っていると、地上はないような気がします。どこまでも天国で…。

ヨセフ でも、夜になればとても冷えるし、こんな雨の少ない時期には、露がまるで雨のようですから。

マリヤ そんなら、ロバにかけてある毛布を取ってきてくださったら？ どれでも厚くて

丈夫ですから。わたしが自分で羊の一番上等な毛で織ったんですもの。

ねえ ヨセフ。心配するのはやめましょう。神様がどうかして下さいますよ。今夜宿屋で柔らかい寝床で眠らせたいとお思いになったら、場所を作ってくださいるわ。神様は世界にこれほどたくさんの物をおいていらっしゃるのに、わたしたちのいる所がないわけはありませんもの。きれいな花だの、木だの、石だの、草だの、星だの。

ヨセフ ほんとにそうだ。あなたを「子供だ」と言ったのは間違っていました。ごめんなさい。

マリヤ では、神様にすっかりお任せして下さいますか？

ヨセフ やってみましょう。心からそうできますように。

マリヤ そんなら、毛布を取ってきてください。わたしは待っております。羊飼いの村で、明かりがキラキラしているのがとってもきれいですから。まるで星の赤ちゃんが天から降りてきたようです。

ナレーション と、そこへ出会させたのは、羊飼いのエタンと、その甥^{おい}のルエルでした。

ルエル ねえ、叔父さん。ちいちゃい羊が、がけつぶちに行ったり、転がったりしたら、下からこうして上げてやるの？

エタン うん。でもそれじゃまだちょっと荒っぽいわ。こういうふうには、そうとしないと、小羊は弱いんだからね。羊飼いのつえは、お母さんの腕みたいなものさ。

ルエル 叔父さん、小羊も飼ってる？ 僕もちいちゃいやつの番をしてもいいの？

エタン いや、小羊はダメだ。羊飼いでないと無理だよ。

ルエル 僕も、いつかは羊飼いになるんだ。

マリヤ 坊や。

ルエル あれ、ちっとも知らなかった。

マリヤ 神様がお恵みになりますように。わたしも、男の子があったら、大きくなって羊飼いになってほしいのです。よい羊飼いに。

ルエル おばさんは、なぜ一人で座っているの？ どうしておうちに行かないの？

エタン ルエル！

マリヤ ここがおうちなのよ。うちの屋根を見てごらんさ。きれいな石でちりばめてあるでしょう。敷物はダマスコのビロードよりきれいで柔らかいのよ。それにわたしは、たった一人にいるわけではありませんの。ここには神様がいらっしゃるから。

エタン 今夜はどこにもお泊まりになる場所がないのですか？

マリヤ わたしたちは巡礼です。今度の税のお調べのために、北のほうから帰ってきたのですが、宿屋には泊まる場所もありませんし、ほかにも、どこもないらしいんですよ。でも構いませんのよ。一緒に来た主人が、ロバのところにある毛布を取りに行きましたから。帰ってきましたわ。

ヨセフ　だんだん草が湿ってくるし、毛布はみんな薄いよ。ねえ、こうしたら…。
マリヤ　あら、ヨセフ。お約束をお忘れになって？「神様にお任せする」とおっしゃった
でしょう？
エタン　お宿が要るのですか？
ヨセフ　そうなんです。屋根の下にさえ入れれば、持っている銀をみんな出してもいい
のですが。
エタン　粗末な羊飼いの小屋で、牛なんかと一緒にでもいいですか？
ヨセフ　構いませんとも！
エタン　では、あそこの羊飼い村の一番外れに明かりが見えるでしょう。あそこに行っ
て、女の人が出てきたら、「エタンがここへよこした」と言ってごらんなさい。わた
したちの寝床と同じように、新しいワラを敷いてくれますよ。
ルエル　僕と一緒に行きましょう。すぐ帰ってくるから。おじさん待ってて。
ヨセフ　ああ、イスラエルの神がお報いになりますように。
マリヤ　ね、言ったとおりでしょう？
エタン　シャローム！ 神様の平和をお受けになるように。エタンの家の祝福が、あな
たがたをお守りするように。

<第2幕>

ナレーション　ここはベツレヘム郊外の、牧人の野原です。今しも、エタンの仲間の羊飼い、
ジャレッド、アベル、ゼイの 3 人が、たき火をしながら、羊の群れの番をしてい
ます。
ジャレッド　エタンはどこだろう？ 一回り済んだころなのに。
アベル　ナタンじいさんのも一緒にしてやってるから、倍の骨折りだ。
ジャレッド　もうけは倍はなかろうに、
ゼイ　エタンは、金のこたあ勘定に入れられないもの。
ジャレッド　じゃ何を勘定に入れるんだ？
アベル　みんなのことさ。でなけりゃあんなにいろいろと、おれたちのこと面倒見れはし
ないんだ。
ジャレッド　へえー。自分のことは忘れちゃって、ベツレヘム中の者のことを考える。それ
がなんだってんだ。
アベル　ベツレヘム中の者が、あいつのことはありがたいと思ってる。
ジャレッド　“ありがたい”だけじゃ、パンは買えないやね。人にどんなにありがたがられた
って、てめえの子供の着物も要るし、羊のオリも作らなきゃならないしさ。ああ、
ちょっとノドが渴いた。そのひょうたんを貸してくれ。
ゼイ　エタンのやつ、かわいそうに。何年も何年もエルサレムに行くことを考えてたの
に、なおさら出にくくなっちゃったよな。だけどかわいそうだね。あれで本当に

行ったら、お姿見たかもしれないんだ。

ジャレッド

なんだ、そりゃ？

ゼイ

神様だよ。イザヤがお宮の中で拝んだというだろ。エタンもそういう神様を拝みたいんだ。神様から、高〜い、きよ〜いお仕事を授かるかもしれないと思ってるんだ。

ジャレッド

ふーん。そんなのは夢うつつのたわごとき。みんな昔の話だよ。今どきそんなことがあるもんか。

アベル

だけど、いつかお告げはあるよ。預言者たちが言ったお方が来られる時には、お告げがあって、待っている人は皆救われるんだ。エタンがよく話してくれるもの。

ジャレッド

エタンか…。

ナレーション

そこへ、当のエタンとルエルがやってきます。

ルエル

小羊が1匹、どうしても見えないんだよ。オリのすぐそばまで、オオカミの足跡が付いている。

ジャレッド

ナタンだろ。あのオリはずっと前から壊れてたんだ。

アベル

くたびれたろう。一杯飲んで、ちょっと横になりな。

エタン

いや、今はダメだ。あとで休むよ。ちょっと捜しに行ってくる。

ジャレッド

そんなことだろうと思った。

ルエル

叔父さん。僕も行きたいな。

エタン

いや、今夜はダメだ。岩のゴロゴロが陰しい道を降りていくんだから、いつか連れてってやるけど、今夜はダメだよ。

ゼイ

よせよせ、エタン。ナタンだって1匹ぐらい構うもんか。自分のものなら別だが、他人の小羊1匹に命がけになるバカがどこにある！ よせよせ！

エタン

ナタンは困ってるからなあ。1匹でも毛を切りや、それだけ金になるさ。“行けばよかった”なんて思いながら寝たって、寝れやしないよ。じき帰ってくる！

ゼイ

(オフ) 気をつけろよ！ 道は暗いぞ！ 踏み外すな！

アベル

あいつほどの羊飼いは、ちょっとないな。

ジャレッド

本当だよ。ダビデの詩の中に、よい羊飼いを神だと歌ってあるよ。

アベル

もし神がエタンのようにだったら、ちょうどああして出ていけような。おれたち人間が、一人でも迷ったり、病気になったり、ひもじかったりすれば、落ち着いていられないんだ。

ゼイ

それとも神様は、ジャレッドみたいかな。ジャレッドだって羊飼いだもの。だけどあいつはよく寝るよな。

アベル

神様のこった。おれたちには分からないんだ。皆、“天の秘密”さ。

おい、ルエル、上着を脱いで、こうやって体に巻きつけるんだよ。羊飼�퍀て者は、代わる代わるに一人ずつ起きて、番をするのさ。

ルエル 僕はちっとも眠くない。起きて星を見ているほうが、よっぽどいいな。ご覧よ！
近いなあ。まるで届きそうだ。

ゼイ そんなら起きてるかい？ お前、寝ないなら、おれがトトロするから。ちよつとでもやつらのとこで音がしたら、起こしてくれよな。

ルエル うん、分かった。ちよつとでも音がしたら、すぐ呼ぶよ。

(音楽) (不思議な感じ、次第に強まって――)

羊飼いの少年ルエル 起きな、叔父さん。起きな！ 見てごらん。

羊飼いや 眠っちゃったんだな、羊は。あ、あれは！ どうしたんだ、この明かりは！

天使 (エコー) 恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。今日、ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ、主なるキリストである。あなたがたは、幼子が布に包まって、飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである。

ルエル わア、僕見えた。叔父さん、見たの、天の使いを？

羊飼いや いや、天の使いは見ない。顔を地面に付けてた。だけど、声は聞いた。

羊飼いや 夢じゃなかったんだね。本当だろうか。本当に救い主がお生まれになったのかね。

羊飼いや “ダビデの町に、主なるキリスト”…。

羊飼いや “飼葉おけの中に”、と言われたな。

羊飼いや 羊飼いの村には、おれたちのうちにも飼葉おけはあるよね。

羊飼いや もううちだったら、もう知らせが来る時分だけど。

羊飼いや おれんとこに、先に行ってみようや。

羊飼いや 急いでいこう。全世界に⁰宣べ伝えよう。救い主がお生まれになったんだ。

羊飼いや 救い主がお生まれになった。

羊飼いや 行かないのかい、ルエル？ お前、分からなかったのかい？ 神様が話していらっしやったんだよ。「約束の主を探しに行け」とおっしゃったんだよ。

ルエル 僕… エタン叔父さんを待ってる。
(羊飼いたち、去っていく。ほどなく、エタンが帰ってくる。)

エタン 見つかったよ！ やっと連れてきた。水をくれ。ケガした所に油を塗らなくちゃ。小さい脚を 1 本折ってるんだ。…ほかのやつらはどうしたんだ？ どうかしたの？ 羊たちは？

ルエル 大丈夫だよ。みんなその子を見つけに行ったんだよ。

エタン 子供？ どの子さ？

ルエル 約束の主だよ。とうとういらっしやったって、天の使いが来て言ったんだ。みんなここにいたんだよ。そしてねえ、そしたら、光が明るく差してきてさ、みんな、目がくらみそうになったんだ。それから天の使いが来て、ほかの人たちは「見

なかった」って言うけど、僕はよく見てたの。そして、「救い主がお生まれになった。その方こそ、主なるキリスト」とはっきり言ったんだ。それから、天いっぱい大勢天使が見えて、歌が聞こえてきたんだ。

エタン 幻が本当になったの？ 本当に？（祈る）神よ、あなたがいらっしやっただのに、わたしはここになくて…。

ルエル 山の辺りが、すっかり明るくなって…。

エタン だけど、僕のいた所は闇ばかりだった。

ルエル それから声が…。神殿の鐘のような…。

エタン 僕のいた所は、なんの音もしなかった。

ルエル 行こう、叔父さん！ 探しに行こう。駆けていけば追いつくよ。

エタン 「主なるキリスト、救い主」って言った？ 約束のみ子が、本当にお生まれになったのかい？ 本当かい？

ルエル そうだよ。行こうよ。行ってみよう。

エタン だけど、こいつがさ、見ててやらなきゃ死んじゃうんだよ。ほかの羊だって、オオカミが来るかもしれない。お前、一人で行けよ。

ルエル 大丈夫かい、一人で？

エタン 大丈夫だとも。走っていきな。

（音楽）

<第3幕>

ナレーション エタンはその夜、ただ一人残って、夜通し、ひん死の小羊の介抱をしたのでした。やっと小羊が元気を取り戻した時、夜は白々と明け染めていました。

エタン お前のために、お告げを聞かれなかったんだよ。死に損なった迷子のお前が邪魔をして、主の栄光を拝むことができなかったんだ。長い間の夢が本当になって、光が照り、み声が聞こえた時に、僕は何の音も聞こえない暗やみの中で、病気の小羊を探し回っていたんだね。けどもう一度同じことがやってきたら、僕はやっぱり同じことをするだろうな。助けてやった小羊の柔らかい体を抱いてやるのは、なんとも言えない。

女1 デボラ、早く水を汲んできましょう。急いで赤ちゃんを拝みに行かなくちゃ。羊飼いたちが言いふらしているから、朝までには、あそこは人がいっぱいになるでしょうよ。

デボラ 夢のようね。ベツレヘムに王様がいらっしやるのね。

女2 ねえ、デボラ。わたしは王様に会ったことがないのよ。

女1 わたしはたった一度あったわ。去年の夏、エルサレムで、ヘロデ王様が、^{いくさぐるま}戦車に乗って町をお通りになった時、ちょうどいたから、真っ赤な衣を着て、金の冠をかぶっていらっしやっただよ。お供の兵隊はヤリをこうして突き立てて、人が

近寄らないようにしてるの。でも、この王様は、ヘロデ王よりずっと偉いんですよ？ 預言者たちが書いている約束の主だって、羊飼いたちが言ってたから。

デボラ だけど、この方はまだお生まれになったばかりよ。位にお着きになって、戦車にお乗りになったら分かるわね。

女1 でも、王様は王様ですから。

エタン それなら、その方が王様なんだね。お生まれになった時に、天の使いが歌ったり、村中 花が咲いたように明るく照らされたっていう“約束の主”という方は、王様だったんだ。宿屋では、一番いい部屋を飾り立てて、ベツレヘム^{いち}のうちから、絹やビロードの布団を持ってきて、寝かせてあげたんだろうなあ。そうだよ。“約束の主”なら、王様でなければダメなもの。だけど、栄光で輝いて、人を恐れさせるような王様たちの神様は、お前やおれには関係ないんだ。おれたちの神様は、太陽や土や雨や星を下さる神様なんだから。

ナレーション そこへ、たった今、救い主を見てきた、3人の羊飼いたちが帰ってきました。

羊飼いいB やっと明け方になったね。もうじき町中が目を覚ますから、皆に話さなきゃならない。あのローマの犬がいなければ、もうとつくに伝わっているんだ。

羊飼いいA そうだよ。威張りやがって、「黙らなきゃ引っ張ってく」なんて脅しやがる。いつまでローマの兵隊に押さえられていなきゃならないんだ。

羊飼いいC 長いことないさ。救い主がお生まれになったんだからな。ほら、聖書に書いてあるだろう。「彼は^{つるぎ}剣を帯び、その前にイスラエルのすべての敵をお下しになるだろう。そして、エルサレムはもう一度、全地の主となるだろう。」

羊飼いいB だが、まだまだだね。おれは、救い主ってのは、強い軍隊の大将だと思ったんだ。なのに、赤ん坊だなんて。

羊飼いいC 大将だって、初めは赤ん坊さ。でなければ人間じゃないよ。ちょうどいいじゃないか。おれたちが準備する間が十分ある。お告げを聞いたおれたちが、あの方が大将におなりになるころには、うーんと強い軍隊を作っておくのさ。おれが隊長になる！

エタン そうか。あの方が偉い大将になって、強い軍隊の先頭に立っていくんだね。おれたちは山に帰ろうね。おれには羊飼いが一番向いているんだ。神のしもべになろうなんて思ったのがバカだった。

ルエル 本当に、お母さん？ あのかわいい赤ちゃんが大きくなったら、本当にエタン叔父さんのような羊飼いいになるの？

ルエルの母 そうよ。聖書に書いてあるわ。覚えてるでしょう。「主は、牧者のように優しく導かれる。」

ルエル エタン叔父さんにそっくりだ。ちょうどそうするんだよ。小羊をそーっと抱いてね。岩のゴロゴロしてる山でも、迷子になった羊を探しに行くし、そしてオオカミなんかから守ってやるんだ。あの赤ちゃんも、羊飼いいになって、大事な羊を救って

やるの？

母 きっとそうよ。あの優しいお母様はおっしゃったでしょう？ あの赤ちゃんは、民を罪から救うものとおなりになるから、“イエス”というお名前なんだってね。

ルエル あ、叔父さん、いたの？ 羊も連れてきたね。さあ、赤ちゃんを見に行こう！ 大きくなると、ちょうど叔父さんのような羊飼いになって、危ない所から、大事な小羊を救い出すんだって。その赤ちゃんは今、ちゃんと叔父さんのうちにいらっしゃるんだよ。

エタン なんだって？ うちに？ おれのうちにかい？

ルエル そうだよ。来てごらん。牛の食べている飼葉おけに、小さな寝床を作ったんだよ。

エタン 姉さん。あの方は、うちにいらっしゃるんだって？

姉 そうよ。そのお母様が、あなたは本当に親切だとおっしゃいました。「村中であんな親切な人はない」っておっしゃったのよ。方々お探しになったのに、どこにも場所がなくてね。宿屋でもいっばいだったの。「もう一度会ってお礼を言いたい」って。「赤ちゃんも見てほしい」とおっしゃってるわ。赤ちゃんが大きくなったら、あなたのように、本当に神のしもべになってほしいと言っていたらいいよ。

エタン 本当に？ おれみたいなつまらない羊飼いになってほしいって？ 僕のことを“神のしもべだ”って言われた？

ルエル 叔父さん、行こうよ。本当にかわいらしいよ。小さくてね、何もまだできないの。まるで羊の赤ちゃんみたいだ。

エタン 神様。お赦^{ゆる}してください。お告げがあった時、聞きもしなかったし、あの人たちが光を見たり、み声を聞いた時にも、本当にうらやましく思ったんだ。だけど、やみの中で、神はそばを歩いてくださった。僕を包んでいた“静けさ”が、神のみ声だったんだ。主よ。これこそあなたの幻です。重荷を負う人に手を貸す時、弱い子供に仕える時、見知らぬ人を助ける時、その人こそ、あなたのみ顔を見ることができたのです。感謝します、神よ。わたしをあなたのように羊飼いにしてくださいましたことを――。

(音楽) (「きよしこの夜」次第に高まって――。)

<完>